

デッド・サイレンス

2008(平成20)年2月13日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★



監督・ストーリー＝ジェームズ・ワン／脚本＝リー・ワネル／出演＝ライアン・クワンテン／ローラ・リーガン／ドニー・ウォルバーグ／ボブ・ガントン／アンバー・ヴァレッタ／マイケル・フェアマン／ジョアン・ヘネイ／ジュディス・ロバーツ (東宝東和配給／2007年アメリカ映画／89分)

……『ソウ』シリーズ第1作のスタッフたちが仕掛けた新たなホラー映画のテーマは、腹話術人形！ 用心すべきは、人々の舌を切り裂いてその声を盗んでいくという恐るべき腹話術師メアリー・ショウ！ ホラーの好きな人はハマるかも……？ これを契機に、BC 6世紀に生まれた腹話術師という言葉のお勉強も……。

『ソウ』シリーズのスタッフが新たな企画を！

私は2月16日にはじめて『ソウ4』(07年)を観て衝撃を受けたが、若者たちに大人気のホラー映画が『ソウ』シリーズ。その第1作の生みの親である、監督のジェームズ・ワンと脚本のリー・ワネルが、一方で『ソウ』シリーズを継続させつつ、他方で新たな企画として打ち出したのが、人々の舌を切り裂いて彼らの声を盗んでいくという腹話術師の幽霊の物語。さて、その企画は『ソウ』シリーズを超えるものに……？

そもそも腹話術人形自体が気味悪い……？

そもそも腹話術という芸自体に少し不気味なところがあるから、私はそう聞くだけでたちまち怖くなってしまいます。腹話術人形が気持ち悪いのは口が大きく割れているためだが、それ以外にも目玉の表情や、顔全体の動作が伴うとさらに不気味なことに。そして、この映画がその恐怖感を一気に高めるのは、口から舌が切り取られ、そこからダラダラと血を流す人間たちの姿が大写しにされること。この人間たちの口や舌が、

そしてその声が、あの腹話術人形に……？

レイブズ・フェアの言い伝えは……？

この映画の主人公はジェイミー・アーシェン（ライアン・クワンテン）だが、彼の故郷レイブズ・フェアには、昔から言い伝えられているある詩があった。それは「メアリー・ショウにご用心。子のない彼女は人形が好き。夢で彼女に会っても、叫んじゃダメだ。舌を抜かれるぞ！」というもの。現にジェイミーの最愛の妻リサ（ローラ・リーガン）は、差出人不明で彼らのアパートに送り届けられてきた不気味な腹話術人形によって、口を割かれ舌を抜かれた無惨な姿に。

初動捜査の誤りは、仕方なし……？

無惨な姿で死亡したりサの第1発見者は、買い物から帰ってきた夫のジェイミー。他に動機のある奴や、不審な動きの人物はいないのだから、ジェイミーがいくらあの腹話術人形が怪しいと言ってもとりあってくれず、リプトン刑事（ドニー・ウォルバーグ）からジェイミーが妻殺しの犯人ではないかと疑われたのは仕方なし……？ また、ジェイミーもバカじゃないから、逮捕するだけの証拠がないのならその間に自分が真犯人（？）を捜し出さない限り、自分の無実を晴らす方法がないと考えたのも当然。

この映画は、どうしてもそんな風にチグハグになってしまうリプトン刑事とジェイミーとの追跡劇（？）が1つのポイントだが、リプトン刑事の初動捜査の誤りは仕方なし……？

父親は……？ 新しい再婚相手は……？

ジェイミーが昔からの言い伝えのあるレイブズ・フェアの実家に戻ったのは、リサの葬儀とともに自らコトの真相に迫ろうとしたため。ところが帰ってみると、意外にも、実家では父親のエドワード（ボブ・ガントン）が車椅子状態となって、新しい再婚相手エラ（アンバー・ヴァレッタ）と一緒に暮らしていた。

ジェイミーが実家を飛び出したのは、実の母親が自殺し、2番目の母親も追い出されてしまったのは父親のせいだと思い込んでいたため。そこでジェイミーはエラに対して、屋敷の中に飾られている絵から最初の妻も2番目の妻も消されている姿を見せ

て、「あなたの絵も消されないように用心しなければ……」とアドバイスしたのだが、所詮それが要らざるものだったことは、ラストになって明らかに……。

ヘンリー夫妻は何を知ってるの……？

リサの葬儀を営むためジェイミーが訪れた先は、葬儀屋のヘンリー（マイケル・フェアマン）。ところが、リサの遺体を見たヘンリーは絶句し、またヘンリーの妻マリオン（ジョアン・ヘネイ）も何かに怯えるように床下に逃げこんでしまった。そこでジェイミーが、「ヘンリー夫妻は何か重大な秘密を知っているナ」とにらんだのは当然。

リサの葬式の日、ジェイミーがマリオンから教えられたのは、詩に歌われているメアリー・ショウの墓碑。そこには腹話術人形の小さな墓碑もあった。そして、ジェイミーが見つけたのが腹話術人形ビリーの墓碑。つまり、ジェイミーのアパートへ届けられた腹話術人形は誰かがこの墓地から掘り出して送ったもの……？ もしそうだとすれば、一体誰が何のためにそんなことを……？ そして、このビリーがジェイミーの妻リサの舌を抜いたの……？

そんなバカなと思いつつ、ジェイミーはビリーの墓地に人形を埋めてしまったから、これにて一件落着。と思ったが……？

ヘンリーが語るおどろおどろしい物語は……？

去る2月13日市川崑監督が92歳で亡くなったが、彼の最後の作品は1976年の作品をリメイクした『犬神家の一族』（06年）（『シネマルーム13』296頁参照）。横溝正史の小説は『犬神家の一族』をはじめとしておどろおどろしい物語でいっぱいだが、ヘンリーがしぶしぶジェイミーに対して語った、昔レイブズ・フェアの町で起こったメアリー・ショウをめぐる忌まわしい事件もかなりおどろおどろしいもの。

1940年代、レイブズ・フェアには劇場があり、そこに住む女腹話術師メアリー・ショウ（ジュディス・ロバーツ）のステージは大人気だった。ところが、ある夜のショーで彼女の腹話術を疑うような発言をした1人の少年が行方不明となったため、その疑いがメアリー・ショウに向けられ、彼女は何者かに舌を切り落とされて殺害されることに。そんな無念の最期を遂げたメアリー・ショウの遺言には、①人形と一緒に埋葬すること、②自分自身を人形にすること、と書かれていたらしい。

問題はここからだ。つまり、レイブンズ・フェアの町に「メアリー・ショウにご用心。子のない彼女は人形が好き。夢で彼女に会っても、叫んじゃダメだ。舌を抜かれるぞ！」という詩が言い伝えられるようになったのは、メアリー・ショウの死亡後、町の人々が舌を切り取られて惨殺される事件が続いたためだ。すると、メアリー・ショウは今なお自分の舌を切り落とされたことを恨み、腹話術人形を使って人々の舌を切り取っているの……？

普通の人がそう聞いても「フーン」と思うだけだが、最愛の妻リサをあんな姿で失ったジェイミーにしてみれば、ヘンリーの話はいかにもごもつとも。そこで、その後メアリー・ショウが住んでいた劇場に向かったジェイミーは、彼女の部屋で人形の設計図と失踪事件の記事のスクラップを発見！ さて、この後のジェイミーの進むべき道は……？

他方、ピリーの人形を見て恐怖心いっぱいとなったヘンリーとその妻マリオンにはどんな運命が……？

いよいよ恐怖のクライマックスへ……

『ソウ』シリーズはゲーム感覚で仕掛けるホラー映画だから、さまざまな工夫が必要だが、シリーズ化は比較的容易……？ しかし、この腹話術人形とメアリー・ショウをめぐるホラー物語は一話完結モノだから、ラストに向けてどんなクライマックスを仕掛け、最後にどんな恐怖を観客に植えつけるのが勝負。

したがって、ここでそのネタばらしをすることができないのは当然だが、いくつかのポイントだけ紹介しておきたい。その第1は、クライマックスの舞台は劇場だということ。また、そこに結集するのはジェイミーだけではなく、追跡劇を演じてきたリプトン刑事もいること。第2のポイントは、劇場には腹話術人形を入れる101個のケースがあり、なぜかお墓に埋められていたはずの、ピリーを除く100体の人形がそこに戻されていたこと。これは一体何を意味するの……？

そして第3のポイントは、遂にメアリー・ショウがそこに出現すること！ ホンマかいな……？ さて、『ソウ』シリーズ第1作のスタッフたちが仕掛けた、最後の恐怖のクライマックスとは……？

2008(平成20)年2月19日記